

Pickup!① 「ユネスコ世界記憶遺産」登録を目指して

1月29日、美津島町の対馬グランドホテルで、下関市の坂本康一市長が議長となり、朝鮮通信使ユネスコ世界記憶遺産第3回日韓共同推進会議が行われ、すべての議題が承認されました。

その後、NPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会の松原一征理事長と、財団法人釜山文化財団の李文燮代表理事による朝鮮通信使ユネスコ世界記憶遺産日韓共同申請書調印式が行われました。



未来に残したい対馬の絶景

Pickup!②

1月30日、対馬市交流センターで「第3回長崎県対馬市文化財・景観写真コンテストの表彰式」が行われました。対馬の豊かな自然や、古くから残る祭りなどの写真が、市内外から30名88作品の応募がありました。最高賞の対馬市長賞は上対馬町の木寺住雄さん「せんだんごの里」が受賞しました。入賞者は以下の通りです（敬称略）。

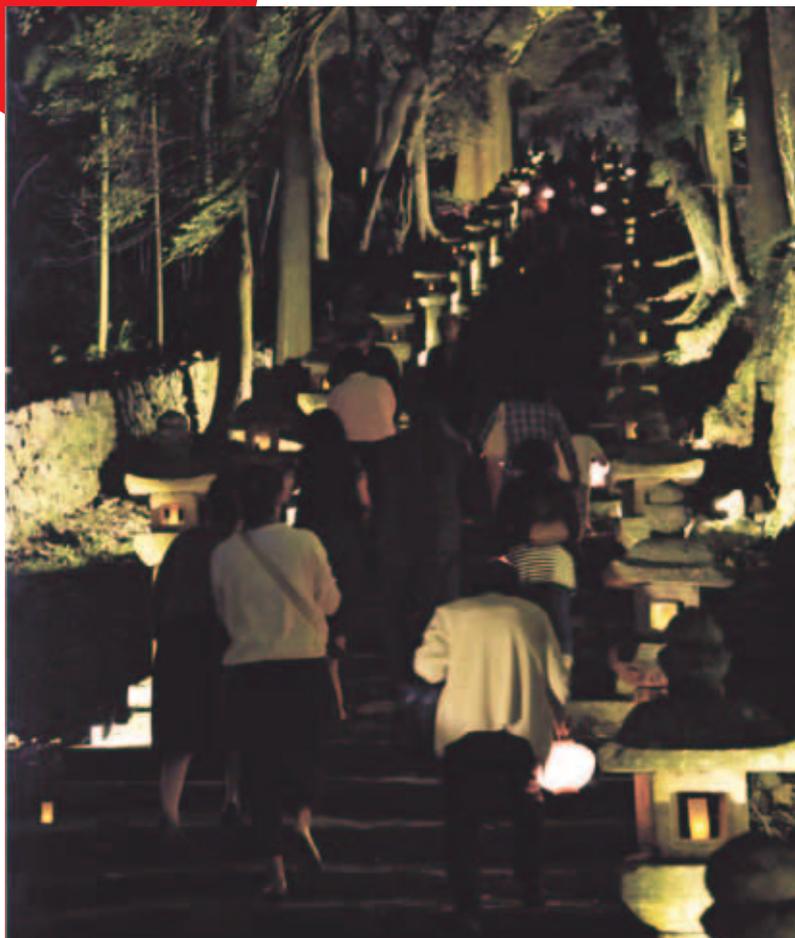
- 対馬市長賞……………木寺 住雄「せんだんごの里」
- 対馬市教育委員会教育長賞……須川 英之「曲の盆踊り」
- 対馬観光物産協会会長賞……………小沢 絵美「藻小屋」
- 審査員特別賞……………吉野 満夫「幻想の海」
- 対馬新聞社賞……………木村 史郎「漁師を見守る西津屋の大岩」
- 入選…寺山 繁「いつもの散歩道」・杉本 徹「万松院祭り」・樺島 悦三「350年の歴史お船江跡」
宮原 勝彦「深山の秋」・財部 安美「紅い鳥居」

※表紙には上位3作品を掲載しています。



対馬

三百五十基以上の灯籠の火で
幻想的な世界に包まれる
万松院まつりを楽しむ



対馬藩主宗家墓所
万松院

1615年に宗家20代義成が父義智の冥福を祈って創建し、以降、宗家累代の菩提寺となった。墓所の手前には樹齢1200年といわれる大杉が墓を見守るように3本ある。

取材・文・写真／加藤脩二
©KKベストセラーズ 「一個人」2016年1月号

提灯片手に百雁木と
呼ばれる石段を上る

「万松院まつり」は島の中心地である厳原の「万松院」で毎年秋に行われる一大行事だ。2015年は創建400年という記念すべき節目にもあたり、初めて2日間にわたって行われた祭だった。夕方から灯籠に火が入り、ライトアップと共に万松院やいつもなら真つ暗な裏山をふくむ付近一帯が幻想的な明かりで浮かび上がり、多くの人でにぎわう夜祭となった。

山門の前ではかがり火が焚かれ、その横から提灯を片手に、132段の石段を照らしながらぞろぞろと上るのである。息を切らしながら上りきったところが対馬藩主宗家の立派な墓所で、そこには宗義智ほか14人の藩主の墓が並ぶ。しかしその墓石の大小には朝鮮との貿易で時の盛運を表すかのように、興隆をきわめたころの藩主の墓石は大きく、国交断絶後の修交に腐心した宗義智の墓石は驚くほど小さくて少し気の毒である。

万松院の隣には旧金石城庭園があり、この日は庭園の歩く道にペットボトルを使ったキャンドルランプが並び、灯火の道ができていた。近くでは餅まきを楽しんだ子供たちが大喜びで、昼には見られない万松院を見ることができた一日だった。





朝鮮国信使絵巻

500人からなる通信使に対して、およそ800人もの人を出して対馬藩はその警護と案内役にあたったという。(提供:長崎県立対馬歴史民俗資料館)



旧金石城庭園

朝鮮通信使を迎えた場所。起伏を生かした庭の中央には池を配し、置き石も美しい。対馬藩宗家の居城、金石城(跡)の南西に造られた庭園。



金石城跡(櫓門)



対馬藩お船江跡

江戸時代、対馬藩が久田川の河口に藩船を格納するために構築した船着場の跡。築堤の石積みは当時の原形を保ち、正門、倉庫、休息の建物跡が残っている。



万松院の三具足

朝鮮国より贈られたと伝えられる青銅製の祭礼用三具足(鶴亀の燭台と香炉、花瓶の3点)。緊密な隣国同士だったことが窺える。

宗家が見つないだ日朝交流の物語に感動する

世界的にも稀有な隣国同士の平和な関係

室町時代から交易を独占し続けてきた対馬と朝鮮との良好な関係を一変させたのが豊臣秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役)だった。この日朝関係の修復に對馬は大きな役割を演じた。「秀吉の出兵でズタズタになってしまった朝鮮との関係を修復したのは、初代對馬藩主の宗義智でした。国交回復には徳川家康からの謝罪を含んだ『先為国書』が要るというところを、家康がそうした国書など出すはずもないと読んだ義智はそれを偽造して送ったのです。その賭けに成功し、関係修復後の朝鮮通信使を出すところまでこぎつけました。でもあまりにも偽造が稚拙だった

ので、朝鮮はそれが本物の国書とは思っていませんでした。あえて騙されたふりをしたのでしょうね」と齋藤弘征さん(對馬市文化財保護審議会会長)が微笑む。国交回復からおおよそ200年の間に12回の朝鮮通信使が来日した。隣国同士が200年以上の長きに渡り、平和的関係を築いたことは世界的にみても稀有なことである。

享保の通信使の江戸往復道中、對馬藩の儒者・雨森芳洲と通信使の製述官・申維翰は互いの主張を譲らず衝突してきたが、旅の終わりには涙を流して別れを惜しんだ。互いに欺かず、争わず、真実をもって交わるの精神。誠信の交わりは、今日の国際交流にも通じるのではないだろうか。

数世紀にわたり最前線であり続けた対馬の痕跡

国境の島に残る 戦いと文化の歴史

対馬はまさに国境の最前線に位置する島である。島の最北部に行けばわずか50kmほどの対馬海峡をはさみ、朝鮮半島の釜山の街をとらえることができる。だからこそ、この島には朝鮮通信使以前からの



金田城跡

山頂より西側は断崖絶壁で、まさに天然の要塞。東側は比較的なだらかだが、城山の山頂から東側一帯にかけて、総延長およそ2.9kmにもなる石垣の城壁が環状に巡らされており、城内への侵入を頑なに拒んでいる。



豆餛の赤米行事

田植えなど赤米まつわる年間10回の行事は、神事で厳格なしきたりを守って執り行われる。代々受け継がれてきた赤米神事だが、後継者がただ一人になり存亡の危機に直面している。



亀ト習俗

無形民俗文化財。壱岐や伊豆のト部と共に古代には宮中の祭祀に關与していたが、亀ト習俗の伝承も今日では対馬のみとなった。

清水山城跡

金石城を守るように築かれた城。清水山の山頂から尾根に沿って一の丸、二の丸、三の丸の石垣が残っている。

加藤庸二

写真家。島をテーマにした写真を撮り続ける一方で雑誌取材、新聞連載を発表し、ラジオのゲスト出演、島旅講師、講演会などさまざまなかたちで発信を続ける島のスペシャリスト。著書に「日本島図鑑」、「島の博物辞典」などがある。1995年に日本の有人島を全踏破した。

国と国、民と民の關係を窺わせる様々な痕跡が残っている。対馬豆餛の岩佐家には亀トが世襲されている。亀トは亀の甲を一定の作法で焼き、生じたひび割れによって吉凶を占う方法で、中国では殷時代に盛行し、日本には古墳時代に伝来したといわれている。金田城は、667年、白村江の戦い後、新羅の日本進攻を防ぐ目的で中大兄皇子によって築かれた。亡命百済人の技術による朝鮮式山城の形式を取り、国防のために防人と烽火が置かれた。巖原から山を見上げると見える石垣は、秀吉が朝鮮への出兵のために1591年に築城した清水山

城跡だ。肥前名護屋城、壱岐の勝本城、上対馬の撃方山城をつなぐ防備線の一つで、毛利高政によって築かれた。時は過ぎ、朝鮮半島と日本の中央を中継する対馬外交はとつくと終わっている。昨今、万松院まつりの対馬の中心地巖原では多くの韓国人観光客でにぎわっていた。韓国では最も近い外国の対馬島旅行が近年ブームである。海上50kmという距離はやはり相当に近い隣国である。昔からこの海峡を越えて外交の窓口になつてきた名残は今日の旅行者による現地交流といつてもいいのかもしれない。



日本遺産

国境の島 壱岐・対馬・五島

～古代からの架け橋～

対馬市は、壱岐市、五島市、新上五島町とともに「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」というストーリーで、平成27年4月24日に「日本遺産」に認定されました。

日本遺産って何？

1 文化財群をストーリーとして認定

ストーリーに沿った文化財をグループ化し、一体としてPRしていきます。それによって、地域の魅力を発信し、ブランド化を進め、地域としてのアイデンティティを再確認することを目指します。

2 ストーリーのタイプは2つ

《地域型》

単一の市町村の中でストーリーが完結します。例として、富山県高岡市の「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡」などがあります。

《シリアル型》

複数の市町村にまたがってストーリーが展開する。水戸市、足利市、備前市、日田市の「近世日本の教育遺産群」などが例となります。

3 2020年までに100件の日本遺産認定を予定

2020年までに年間の訪日外国人旅行者2000万人達成を目標に掲げる方針に沿って、文化庁の日本遺産認定件数も100件を目指しています。地域の活性化、観光客の受け皿としての日本遺産が全国各地に増えていくことが望ましいです。



日本遺産ロゴマーク

「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」とは？



「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」はシリアル型の日本遺産に相当し、3市1町（壱岐市、対馬市、五島市、新上五島町）にまたがってストーリーが展開されています。

長崎県の島は日本本土と大陸の間に位置することから、古代よりこれらをつなぐ海上交通の重要な場所とされ、交易や交流の拠点としての役割を果たしてきました。特に朝鮮半島との関わりは深く、壱岐は古代に海上交易で王都を築きました。対馬は近世以降、日本の外交の窓口となり、朝鮮王朝との貿易を行い栄えました。また、五島は、遣唐使船の日本最終寄港地だったと伝えられています。それぞれの島には、現在も古代住居跡や城跡、庭園などが残され、当時の交流の様子がうかがえます。また、焼酎や麺類などの特産品、民俗行事などにも大陸からの影響を見ることができます。

このように、古代から現代に至るまで、それぞれの島は大陸と日本の交流の架け橋として人的・物的交流に大きな役割を果たしてきました。今回の日本遺産認定において、そのストーリーをあらわす計27件の有形・無形文化財（壱岐市10件、対馬市11件、五島市3件、新上五島町3件）が構成文化財として認定されています。



黒瀬観音堂の銅造如来坐像
(加藤庸二氏より写真提供)

対馬市の構成文化財

- | | | |
|-------------|------------------|-------------|
| 1. 金田城跡 | 5. 万松院の三具足 | 9. 旧金石城庭園 |
| 2. 対馬の亀卜習俗 | 6. 銅造如来坐像(黒瀬観音堂) | 10. 朝鮮国信使絵巻 |
| 3. 豆殻の赤米行事 | 7. 清水山城跡 | 11. 対馬藩お船江跡 |
| 4. 対馬藩主宗家墓所 | 8. 金石城跡 | |

KKベストセラーズ発行の雑誌『一個人』2016年1月号の特集「日本遺産を旅する」に、日本遺産18件のうち4件が掲載されました。前の3ページは、その中に掲載された対馬に関する記事を特別に転載したものです。

問い合わせ

日本遺産「国境の島」推進協議会 対馬市部会
(対馬市歴史のまちづくり・世界遺産登録推進室内)

☎0920(53)6111 FAX0920(52)1214